

宇輝人

vol.44



福島 万希子 Fukushima Makiko

昭和43年生まれ。八代市出身、小川町在住。東京芸術大学大学院を修了後、インドやネパールなどに1年間遊学。帰国後都立高校の美術教師を経て、山梨県小淵沢町で開窯。平成13年に夫の実家がある小川町へ工房を移す。移してから、作品が自然に大きくなったという。有機的な作品はテレビやコマーシャル、雑誌などにたびたび登場し、その存在感を示している。

「いのち」の輪郭をとらえ、有機的な器を作る

「いのち」を刻み、膨らませる

緑が静かに揺れる山あいの集落。柔らかな日が差し込むギャラリ―では、光をまとった器たちが瑞々しい表情を見せている。その突起や稜線は、安定感を漂わせつつも、今にも動き出しそうだ。

「自分なりのかたちを作りたいと思っています。全ては点から始まっていて。そして点は線となり、全面を線刻で覆って『刻々の器』になりました。垂直を保って刻んだ線がだんだんと枝分かれして、器全体が覆われていくのが楽しくて。初めて作ったのは大学院の修了制作だったけれど、まだ飽きないんですよ。時々、同じものを作っていると頼まれるけど、作るのが上手になっちゃって、昔のようには作れないんです」と彼女は微笑む。

土との出会いは大学に入ってから

ら。英語方面で進路を考えていたが、高校3年の冬に、突然美術へ変更。両親は彼女を信じて反対せず、それを後押しした。一年後、当時興味のあった染織が学べる工芸科のある大学へ進学。大学時代は展覧会に足しげく通い、陶器や絵画、骨董品などを見て回った。3年生になると、いつの間にか陶芸を中心に専攻に悩む自分に気づき、その道へ。

「かたちを作ることが面白いんです。『ふくらみの器』は妊娠中に赤ちゃんがお腹をぐーっと押した時に、内側にエネルギーを感じて。赤ちゃんとの共同制作だったのでしようか。体の中から、かたちが自然に湧いてくるような感覚がありました。柔らかなたぐさんの突起を持つ『とつとつの器』のイメージが生まれたのは、幼かった長女と散歩をしていた時。真冬に芽吹こうとする野バラの姿にゾクゾクしたんです。こんなに寒いのに

う春の暖かさを感じているのかわかっています。今は、知人から豆の皮がむけた感じねって言われる無地のシンプルなかたちが作れるようになって。かたちを保つのが難しいけれど、やっと思えるようになったんです」と柔らかな表情を見せる。

「とつとつ、こくこくと日常を紡ぐ彼女の強さが作品の土台になっています。制作は根気を要する工程の繰り返しですが、彼女はそれを淡々とこなし、さりげない日常使いの器に重厚な彫塑の世界を持たせることができる、まれな存在になりました」。八代市にある珈琲店ミミックの画廊で、展示を担当する笠井麻衣さんはそう話す。

土に命を吹き込む手は、力強くも繊細なりズムを刻む。「手数が少ない方がいいと思うけれど、どうしても触りすぎてしまうせいか、器が生き物っぽいと言われるんです」と彼女は笑った。

「一緒に暮らしたいものたち」

とき 11月28日⑩～12月2日⑩
ところ 島田美術館(熊本市西区)

フレームや食器、一輪挿しなど生活に彩りを与える作品約70点が展示されます。
来年3月には、鶴屋百貨店でグループ展を開催予定。



展覧会情報は
こちら



生み出される陰影の美しさ



刻々の器



ふくらみの器



多面体の器